

平成 19 年度 NGO 専門調査員報告書

国際協力 NGO が所有するリソースを有効利用した国際理解教育の推進

特定非営利活動法人 HANDS

専門調査員 和田知代

目 次

1 受入団体概要、及び調査員略歴 -----	2
1.1 受入団体概要 -----	2
1.2 専門調査員略歴 -----	2
2 調査・研究活動内容 -----	3
2.1 実施期間 -----	3
2.2 活動目的及び背景 -----	3
2.3 調査・研究内容と結果 -----	4
2.4 分析 -----	22
2.5 提言 -----	26
参考文献 -----	27

1. 受入団体概要及び調査員略歴

1.1. 受入団体概要

HANDSは、国際的な保健医療協力を通して、世界の人々が自らの健康を守ることができる社会の実現を目指すNGOとして、2000年に設立された特定非営利活動法人である。各国のNGO、政府および国際機関と協調して、環境や文化に配慮しつつ、それぞれの国や地域の保健医療の仕組みづくり、人づくりを支援している。

HANDS活動の3つの柱は以下である：

- 保健医療システムの開発と実践
- 専門的人材の育成
- アドボカシー（政策提言）

上記「保健医療システムの開発と実践」として、現在は、ケニア西部、インドネシア、ブラジルのアマゾン地域で、地域保健・医療向上プロジェクトを実施している。また、「専門的人材の育成」として、パレスチナ、インドネシアから研修生を迎えて母子健康手帳に関する研修を行う他、ワークショップやセミナーなどを通じて、国際保健協力に関わる人材育成活動も実施している。さらに、「アドボカシー（政策提言）」としては、保健医療分野の国際協力に関する啓発や調査研究活動にも積極的に取り組んでいる。

1.2. 調査員略歴

保育士として幼児教育に携わった後、米国ワールド・カレッジ・ウェスト大学で国際開発学士号を、名古屋大学大学院で国際開発学修士号を取得。1994年より、I.C.Net、グローバル・リンク・マネージメント等の国際開発コンサルタント会社に所属し、JICAメキシコ家族計画母子保健プロジェクト長期／短期派遣専門家、及びJICAによる国際協力事業の調査研究／評価などの業務に携わる。2000年より2001年まで、FASID研究フェローとして、国際保健協力分野で活動する米国NPO、Management Sciences for Health（MSH）において、思春期リプロダクティブヘルスの研究を行う。2002年にHANDSに入職し、プログラム・ディレクターとして国際保健協力プロジェクトの運営／調査研究／評価などを実施後、2005年に退職。2007年5月から、外務省NGO専門調査員として勤務。

2. 調査・研究活動内容

2.1. 実施期間

本調査研究は、2007年5月1日より2008年3月31日の、11ヶ月間にわたって実施した。
うち海外調査は、2007年10月28日より11月12日に、ブラジル共和国にて実施した。

2.2. 活動目的及び背景

国際社会化が進むなか、日本における多くの小中学校、高校等では「総合的な学習の時間」の中で国際理解教育を実施して、生徒達の国際意識の確立を図ろうとする動きが活発化している。しかし現実問題として、学校教員の中で、国際理解教育に関する訓練を受けている人は一部であり、多くの教員は日々の多忙な業務に忙殺されて、望むような形の国際理解教育を実施できず、また適切な教材も所有しない。

このような状況の中、HANDSは国内の小中学校、高校等などから、国際理解教育の一環として授業で話をして欲しい旨を依頼される機会が増えている。こういった機会には、HANDSが活動する途上国フィールドで撮影した写真などを見せながら、途上国の人々の暮らしや、HANDSによる保健協力活動の様子を紹介し、若者の国際理解を深める活動を実施している。しかしその実情は、国内の学校で国際理解教育活動を実施することがHANDSスタッフにとって本来業務ではないため、「空いている時間に、見えそうな映像資料などをもとに教材を急ごしらえし、授業を組み立てて実施する」というレベルを超えるものとはなっていない。

HANDSには、途上国フィールドで得た映像資料（写真・ビデオ等）や文献資料、現地の人々のエピソードなど、国際理解教育の素材となりうるリソースが豊富に蓄積されている。しかし、小中学校、高校や大学などの各レベルにあわせた国際理解教育を実施するにあたり、これら豊富なリソースを活用して、効果的な教材や参考資料を作成するための時間もノウハウも組織内に十分蓄積されていない。

このような背景から、HANDSが数多くの途上国支援の現場で培った経験と豊富なリソースを、ますます高まる学校現場からの国際理解教育への協力要請に有効活用するためには、スタッフの本来業務に支障をきたすことなく、HANDS独自の効果的な「国際理解教育教材パッケージ」を作成することが望まれた。これにより、日本の学校においてより意味のある国際理解教育を行うことが可能となり、日本人の国際意識向上に資することが期待された。

2.3. 調査・研究内容と結果

主として以下のような調査研究内容により調査研究を進めた。

日本における国際理解教育の現状に関する情報収集・分析を行う

他団体による国際理解教育のための資料・教材を収集・分析する。

HANDS東京本部において、HANDSがこれまでの活動を通じて収集・作成してきた様々な資料のうち、国際理解教育の教材になりうる資料を整理・分析する。

HANDSの海外プロジェクト・サイトを訪問し、国際理解教育の教材になりうる資料を収集する。

上記 ～ で収集、整理、分析した結果を元に、国際理解教育のための教材を試作する。

上記 で試作した教材を使って、首都圏の小中学校等で国際理解教育模擬授業を行う。

上記 6 項目の研究結果について、以下に記述する。

2.3.1. 日本における国際理解教育の現状とニーズ

日本の小中学校における国際理解教育の現状

日本の国際協力NGOは、国内の小中学校から国際理解教育授業の実施を依頼されることが多い。このため、まずそれら小中学校における国際理解教育実施の実態がどのような状況にあるのかについて、文献¹やインターネット²、及び教師からの直接ヒアリングを中心に調査した。その結果、表 1 にまとめたような傾向があることが明らかになった。

¹ 米田伸次、岡崎裕、高尾隆、現場教師を対象とした国際理解教育の実態調査、国際理解教育の最前線、グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究、第2分冊、平成 15 年度～平成 17 年度 科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書 研究課題番号 15330195、2006; 1-36

² 福島県国際交流協会、平成 14 年度福島県小・中・高校における国際理解教育実態調査報告書、2003、<http://www.worldvillage.org/ed/kokusairikai/kokusaireport.html> (2008 年 3 月現在)

表 1 小・中・高校における国際理解教育実施の現状

実施状況	小学校・中学校・高等学校の多くで、国際理解教育を実施している。小学校では、「総合的な学習の時間」の中で、国際理解教育が多く実施されているが、中学校や高等学校になると、「教科（外国語・社会科）」の中で実施されていることが多い。時間にすると、小学校では年間35時間以下で取り組んでいる学校が多い。
内容	「外国語会話（英語）」と「文化」の二つの内容で取り組んでいる学校が多い。英語では「コミュニケーション能力の育成」、文化では、「世界（他国・他地域）の人々の生活や文化と理解」、「世界と日本のつながり」などのテーマが多く取り上げられている
手法	「ALT（Assistant Language Teacher：外国語指導助手）による英語学習」、「子供の自主的な調べ学習」、「テレビ・ビデオなどの視聴覚教材」、「在日外国人との交流」、「参加型体験学習」、「インターネットを活用した学習」の活用が多い。
授業の形式	子供の自主的・主体的に参加することのできる学習方法を適宜計画の中に組み込むこと、子供の現実がよく把握されていること、国際理解教育に対する理解がしっかりとされていること
授業実践例の利用	既存のカリキュラムをそのまま実践するよりも、あくまで参考として教師自身で作り替えることが多い
実践上の阻害要因	「教師が多忙」、「研修や研究時間が十分とれない」、「教師の国際理解教育に対する理解・認識不足」、「外国語学習に偏する傾向」、「経費不足」、「授業時間不足」、「国際理解教育が広汎にわたっていて焦点がしぼりにくい」、「学校内での協力体制不足」、「地域と連携したいが多忙でできない」等が、より良い国際理解教育をすすめる上での課題として指摘されている。
国際理解教育を通じて教師が育てたいと望む人間像	地球市民として、多様な文化、生き方、立場への共感と共生、自分の考えをもち他者に発信できる能力、

上記のような学校現場の現状から、日本における国際理解教育は、教師たちが多忙な業務の中で試行錯誤しながらも、目の前の子ども達の現実に対応し、子ども達自身の参加を促しながら、子ども達の伝え合いや共生といった力を育成するためのカリキュラムを目指して、それぞれの教師が「私の国際理解教育」を構築しようと努力していることが伺える。このような学校現場教師の努力を効果的にサポートするために、国際協力NGOは重要な役割を担えるのではないかと推察される。

次頁Box 1 は、今年度、関東地方のある県で週末に実施された国際理解教育セミナーに参加した現役学校教師（小・中・高校）たちの生の声である。なお、休日にこのようなセミナーに参加するほどであるから、一般的な教師よりも、国際理解教育に関して熱心な教師たちであると考えられる。

Box 1 国際理解教育の現状に関する現場教師達の声

「学校での国際理解教育は、『ALT³に任せておけばいい』『英語教育してればいい』という見方が多いですね。また、ALTの出身国が、英米豪などに限られている自治体が多いです。だから生徒たちは、「国際」といえば、「英米豪」みたいに認識してしまう。自治体によっては、インドやフィリピンなどのALTも雇用しているところもあって、それはいいなと思いますね。隣人の、アジアのことなどをもっと学んでほしいですね。」

「ネット上で国際理解教育を検索すると、実際の指導実践事例などたくさんあるんですけどね、それ以上の情報にはアクセスしにくいですね。また、実践例をもとに自分でカリキュラムを立てようと思っても、例にある情報が、どこから来ているのかという、さらに深い情報までは示されていないくて、実践例を十分参考にできないというのが現状です。また、ネットで検索すると、情報がありすぎて、どれがいいのかわからなくて、忙しいから大量の情報を吟味している時間もないし・・・。」

「正直なところ、国際理解教育って、なんか行き当たりばったりでやっている感じが否めなくて、自分自身、辛いです。小学校では、個々の先生が、単発で国際理解教育をやっているのが現状。学校として国際理解教育に対する共通理解を持って、行き当たりばったりでなく、もっとちゃんと、システムティックにやっていきたいです。でも国際理解教育について相談できる人が、身近にいないんです。」

「指導実践例が『10時間』などになっていて、しかし自分の授業時間は『1時間』の場合、『じゃあ、その内容を、どのようにしたら1時間でできるか』というところで、つまづいちゃってます。」

「薄っぺらな『国際交流』じゃなくて、もう少し、子供の心にしみこむような内容の国際理解にしたいです。恵まれない国の問題とか、先進国の格差問題や環境問題にも、興味を持ってほしいんです。」

「専門教育の高校（商業高校、工業高校など）では、社会や英語の授業時間が圧倒的に少ないので、限られた授業時間内に、どうやって効果的、効率的な国際理解教育にするかが課題です。日本史と国際理解教育をリンクさせるとかね。」

「国際化とは、外国を知ることではなく、日本人であることを、ちゃんと自覚すること、日本のことを、ちゃんと知ることだと思います。」

国際理解教育とは — 開発教育との違い —

国際協力NGOが国際理解教育を検討する際、日本の教育現場で一般的に用いられる「国際理解教育」と、国際協力の世界で用いられる「開発教育」との違いについて基本的に把握しておく必要がある。二つの言葉の意味的な違いと関係性について様々な議論や定義がある中、あえて単純化すると、「国際理解教育」とは公平な地球社会を目指すための包括的な教育を指し、その構成要素の一つとして、開発、貧困、協力などに焦点を当てた「開発教育」があるといえる。

³ ALT: Assistant Language Teacher: (外国語指導助手)

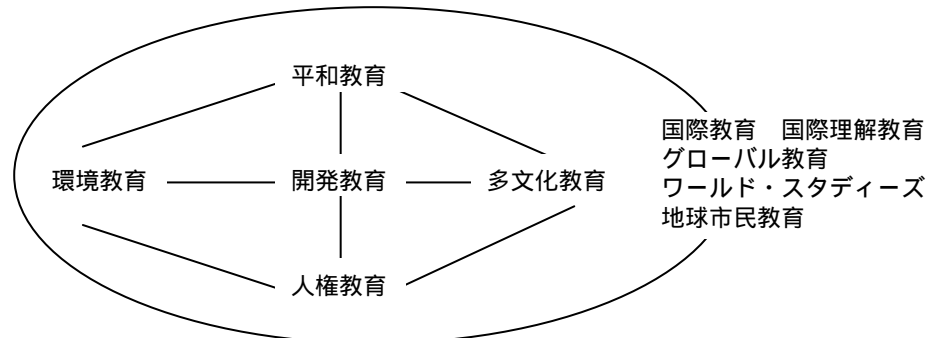
歴史的視点から違いから見ると、「国際理解教育」の場合は、第二次大戦後、国際社会の相互理解不足が戦争の原因になったという反省からユネスコが提唱した「他国・他文化の理解や相互依存関係の理解、人権や多様性の尊重などを基盤として、平和な社会を形成する市民を養成するための教育」であり、学校教育活動である。

一方、開発教育は、1960年代にアフリカなどの発展途上国で国際援助活動を行っていたNGOによって始められた社会教育活動であり、当初は、発展途上国で貧困にあえぐ人々の暮らしを先進国の人々に知らせ、支援を仰ぐという性格が強いものであった。その後、発展途上国の貧困問題は、先進国との関係性の中で構造的問題として発生していることが明らかになり、開発教育の方向性は、そのような問題解決に向けて、市民ひとりひとりが当事者意識を持って行動しようとする教育活動へと変化していった。

組織的な違いから見ると、国際理解教育には「国際理解教育学会」が存在し、中心的な役割を果たしているのに対し、開発教育にはそれに相応する学会はないものの、NPO法人開発教育協会（DEAR）が中心的な役割を果たしている。国際理解教育学会も開発教育協会も、諸外国の現実や国際社会の動向に関心を示す専門組織であり、研究会やシンポジウム、現場の教師への調査活動や支援活動を通じて日本国内の教育現場に貢献し、政策策定にも影響を与えようとする性格を併せ持つ団体である。⁴ その他、外務省やユニセフ（ユニセフ駐日事務所、日本ユニセフ協会）も開発教育に関し中心的な役割を果たしている。

なお、国際理解教育と類似するものとして、アメリカで進展した「グローバル教育」、イギリスで発展した「ワールド・スタディーズ」、あるいは「地球市民教育」などが存在する。また、国際理解教育を構成する、他の地球的課題（平和教育、環境教育、多文化教育、人権教育）についても、基本的に把握しておく必要がある。これらの関連性については山西⁵による以下の図式が分かりやすい。

図 1 国際理解教育と開発教育



⁴ 永田佳之、鶴見陽子、開発教育協会の動向と国際理解教育、国際理解教育の最前線、グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究、第2分冊、平成15年度～平成17年度 科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)）研究成果報告書 研究課題番号 15330195、2006；111

⁵ 山西優二、国際理解教育とは違うの？、開発教育ってなあに、開発教育協会 2005；14-15

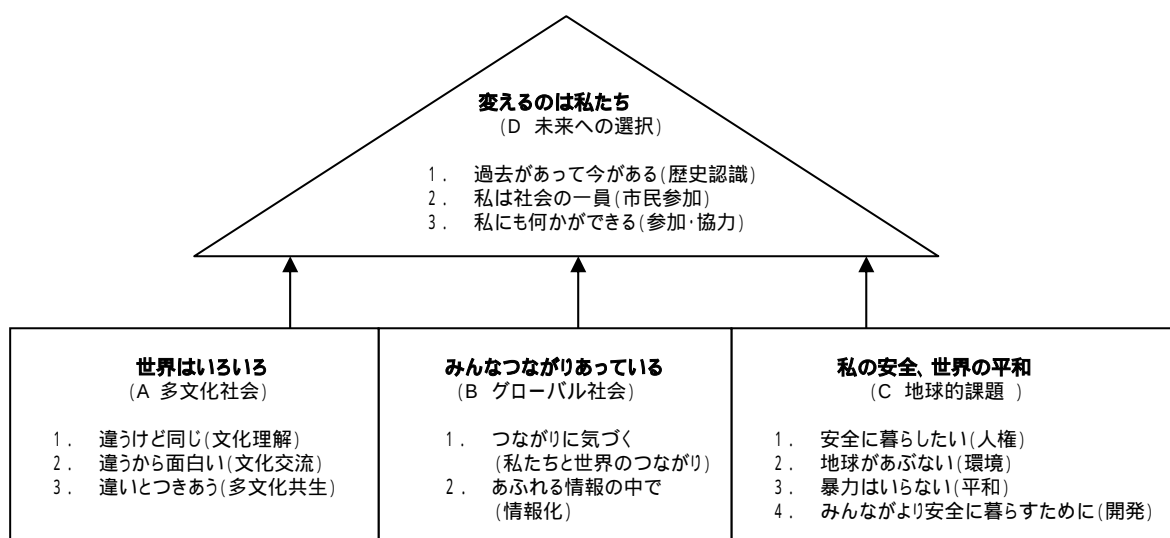
国際理解教育の基本枠組み

国際理解教育は、国語や算数などの一般的な教科に比較するとまだ歴史が浅いため、普遍的な指導要領などがなく、現場の教師達は試行錯誤しながら実践しているのが実情である。そのため、「国際理解教育をしなければならないが、扱う内容が広汎であるため、長期的視野にたって目指すべき目的や今プライオリティを持ってすべきことなどがはっきりせず、いきあたりばったりでやっている不安がある。」と訴える教師は少なくない。

国際協力NGOが国際理解教育に関わる際も、当然、同様の問題に直面する可能性があるため、現存する国際理解教育の基本的枠組みについて調査した。その結果、様々な理論や議論がある中で、大津⁶による国際理解教育の基本枠組みが示す「学習領域の構造」(図2)は、学校教師や国際協力NGOが、国際理解教育の具体的授業カリキュラム案を検討する上で、非常にわかりやすく使いやすい枠組みであるという結論に至った。

国際理解教育とは、子ども達が国際化した現代社会で生きていくために必要な資質や能力を育成する教育である。言い換えると、国際理解教育を通じて、国際化した社会に対する関心や認識を深めると共に、学習者と社会との関わりを明らかにし、学習者が社会の一員としてどのように行動していくのかを考えさせ、ひいては行動させることが究極の目的である。その意味においても、大津による基本的枠組みは非常に汎用性があると考えられる。

図 2 国際理解教育 学習領域の構造



⁶ 大津和子. 国際理解教育の学習領域. 国際理解教育カリキュラム開発の基本枠組み. グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究. 第1分冊. 平成15年度～平成17年度 科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書 研究課題番号 15330195. 2006; 18-25

表 2 国際理解教育 実践的枠組み

	1	2	3	4
A. 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
B. グローバル社会	相互依存	情報化		
C. 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D. 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	

このような基本的枠組みの考え方は、具体的な国際理解教育の授業を実践する際、どのような内容で授業を組み立てるか、あるいは、年間を通じて、どのように授業を計画していくかを検討する際の参考になる。また、年間を通じて、どの学習領域に重点を置き、どの学習領域が十分カバーされていなかったかを、客観的に把握することもできる。

また、学校教師は、このような「学習領域」という考え方をベースに授業計画を立てることが通常であるため、こういった枠組みを国際協力NGO側も理解し、学校等から国際理解教育授業実施の依頼があった場合には手元に準備して、学校教師側と国際理解教育授業の「ねらい」や「活動」等の具体的すり合わせをする際のツールとして使用すると、大変効果的である。

2.3.2. 他団体による国際理解教育のための教材

国際理解教育や開発教育の教材・手法には、主に表3にある10種類⁷が存在する。

表 3 国際理解教育や開発教育の教材・手法

種類	内容	例
フォト(物) ランゲージ	写真や絵(や“物”)を活用し、そこに込められた情報を読み解く。グループの中で話し合う中で、個々人の先入観や読み取りの違いに気づく。	・ 地球の仲間たち ・ 地球家族 ・ バングラ・ボックス
シミュレーション、 ゲーム	ある事象をモデル化、単純化し、それを擬似的に体験する。言葉による説明ではわかりにくい状況を、疑似体験を通じて認識する。	・ 新・貿易ゲーム ・ The Paper Bag Game ・ 世界がもし100人の村だったら

⁷ 木下理仁、開発教育教材入門講座。

ロールプレイ	ある特定の人や物の役割を演じ切る。演じることにより、異なる立場の意見や考えを共感的に理解し易くなる。	・ パーム油のはなし ・ マジカル・バナナ ・ 「援助」する前に考えよう
わたしの気持ち	ある出来事や問題について知った時の自分の気持ちについて、他の人と話し合う。同じものを見ても、いろいろな見方、感じ方があること、ひとつの出来事にいろいろな側面があることを知る	・ Global Express
ブレイン・ストーミング	あるテーマについて、参加者全員で自由に意見やアイデアを出し合う。相互の自由な発言の中で、自分の考えが整理でき、また発想を広げられる。	・ 世界からやってくる私たちの食べもの
ランキング	ある問いに対して多数の選択肢がある場合、またその理由(根拠)を明らかにする。参加者個々人の考えの違いが浮かび上がりさらなる話し合いへと発展させやすい。	・ 貧困と開発、他多数
ディベート	あるテーマに対して「賛成派」「反対派」がルールに従い論争を繰り広げ、「審判員」が勝負を判定する。知恵を論理的に組み立て表現する力を形成し、異なる立場の意見への理解が進む。	・ もっと話そう！平和を築くためにできること
部屋の4隅	ある問いに対し、4つの選択肢の中から自分の答えを選び、会場の中で移動する。多様なものの見方・考え方があることを知ると同時に、その問題についての理解を深めることができる。	・ もっと話そう！平和を築くためにできること
プランニング	現状認識と問題点への分析を踏まえ、その問題解決への具体的なプランを立てる。「知り、考え、行動する」というすべての要素を含む未来志向の学習活動	・ 世界がもし100人の村だったら
メッセージ作り	ポスターや壁新聞の制作、パフォーマンスなどで、自分たちが学んだことを表現したり、外へ発信したりする。「他者へ伝える」ことを通じて問題のより深い理解にもつながっていく。	・ もっと話そう！平和を築くためにできること

表3に示された教材・手法のうち、国際協力を実施する日本のNGOはどのような教材を所有しているのか調査した。その結果、全ての国際協力NGOが国際理解教育や開発教育のための教材を所有しているわけではなく、また、所有していても、主として、フォトランゲージや、物ランゲージといった、現地の様子を伝える素材を加工したものであるケースが多いことがわかった。

フォト(物)ランゲージ以外の教材は、国際理解教育や開発教育、あるいは国際交流を専門的に行う団体で開発・制作されているケースがほとんどである。その理由として、フォト(物)ランゲージ以外の教材の開発・制作には、教育教材開発に関する専門的知識や経験と、ある程度の時間とエネルギーが必要とされるため、フィールド・プロジェクトが主たる活動である国際協力実施団体が、本来業務の合間を縫って実施するには少々荷が重過ぎるからではないかと推察される。実際にいくつかの教育教材を入手して

検討・分析してみたが、フォト（物）ランゲージ以外の教材の多くは、その制作に、年単位の時間が費やされている様子が伺われた

2.3.3. HANDS東京本部で得た国際理解教育教材の素材

HANDS東京本部にて、国際理解教育の教材として使えるリソースを調査した。その結果、表4に示したような素材に、教材として加工できそうな可能性を発見した。

まず、プロジェクトサイトで日本人スタッフが撮影した様々な写真は、比較的容易に、異文化理解のための教材へと加工できるのではないかと思われた。特に、日本人スタッフの興味をひいた、現地の珍しいもの（生きもの、習慣、食べもの、建物、日用品等）を撮影した写真は、異文化理解の目的での使用可能性が高い。

また、民芸品や地図などの「もの」も、“物”ランゲージのような教材へと比較的容易に加工できると考えられる。プロジェクト資料などの文書系の素材や、現地スタッフによるエピソードは、HANDSが現地で取り組む保健問題をテーマとする国際理解教育教材としては有効活用できる可能性があるが、それにはかなりのエネルギーと時間が必要とされるだろうと思われる。

ただ、いずれの素材も、もともと国際理解教育用の教材として使うことを前提としていないための限界があるというのが、HANDS東京本部が持つ様々な素材の全体的な印象であった。そこで、HANDS東京本部のスタッフと検討した結果、国際理解教育用の教材として使うことを前提として、あらためて素材を収集することが決定され、そのフィールドとしてHANDSブラジルプロジェクト・サイトが選ばれた。

表 4 HANDS 東京本部で収集した国際理解教育教材として使用可能な素材

種類	内容
写真・ビデオ	・ プロジェクトサイトの村や街を撮影したもの ・ プロジェクトサイトの村や街の人々を撮影したもの ・ プロジェクトサイトで日本人スタッフの興味をひいた生き物、食べ物、珍しい習慣、その他色々な珍しいもの、
物品	・ プロジェクトサイトで手に入れた民芸品 ・ プロジェクトサイトで手に入れた地図
文書系	・ プロジェクト関連の記録書類 ・ 現地へ出張した日本人スタッフによる報告書 ・ 団体の広報用に作成した現地スタッフによるエピソード

2.3.4. HANDSの海外プロジェクト・サイトで収集した国際理解教育教材の素材

既述の、HANDS東京本部において「日本の学校での国際理解教育教材として使用可能な様々な素材」を収集して分析した結果を踏まえ、HANDSスタッフと共に、海外プロジェクトサイト（ブラジル）で収集すべき国際理解教育教材の素材について検討した。その結果、まず作成する教材のイメージについて、多種類の国際理解教育教材の中から、教育教材作製経験がほとんどない国際協力NGOが、本来業務であるフィールド活動に支障をきたさない範囲で取り組める「フォトランゲージ」及び「物ランゲージ」を作製することを決定し、以下 ～ の「素材」の収集を試みた。

ブラジルの子供の日常生活を理解するための資料

HANDSプロジェクト対象地域である農村部、及び都市部において、特定の子供の一日の生活を追って、写真撮影及び、一日の生活に関する聞き取り。できれば、農村部と都市部の異なる地域のことを2種類収集する。

ブラジルの子供の学校生活を理解するため物品

ブラジルの小・中学生の制服、及び彼らが毎日学校へもって行くカバンとその中身一式（教科書、ノート、筆記用具、コップ、歯ブラシ等）。農村部と、都市部の異なる地域ものを2種類収集する。

日本とブラジルのつながりを学ぶ物品

日本のアニメで、ポルトガル語に翻訳されてブラジルで販売されている人気漫画本を購入した。また、日本がブラジルでどのように伝えられているかを日本の子ども達に知らせる教材として、日本の生活についての記述がある社会科教科書、日本の歴史についての記述がある歴史教科書、及びブラジルで使われている世界地図などの収集。

HANDSプロジェクト対象地域の子供と、日本の子供との交流の可能性検討

HANDSプロジェクト対象地域の子供と、日本の子供との交流の可能性検討するため、現地の生徒や教師達とグループディスカッションを実施した結果、以下の提案が出された：

- ・ 絵画の交換
- ・ それぞれの国の子供たちが、「一番たいせつなもの」というタイトルで写した写真の交換
- ・ 文章の交換 「わたしの夢、ぼくの夢」など

上記 ～ のうち、最終的に表5「ブラジルで収集した国際理解教育教材用素材リスト」に挙げた「素材」を収集した。これら素材を収集するために要した日数は数日間、この程度の時間であれば、フィールドプロジェクトの本来業務に支障をきたすことなく、国際理解教育用教材作製が可能であると判断された。

表 5 HANDS プロジェクトサイトで収集した国際理解教育教材用素材リスト

< 物： 子供の日常生活品 >

1	学校系 (都市部 / 農村部小学生・中学生の学用品)	通学バッグとその中身 (教科書 / ノート / 筆記具 / その他文房具 / 歯ブラシ / 水筒)
		学校の時間割
		学校の年間予定表
		制服
2	娯楽系	日本のマンガの現地語版
		地図 / 地図帳
3	社会文化系	日本のことを記述した箇所がある現地の歴史 / 地理教科書

< 写真： 子どもの日常生活 >

1	家	・ 家 ・ 家族の写真 ・ 家の手伝い ・ 宿題 ・ 寝室 / 寝具
2	学校	・ 学校建物 ・ 教室 / 授業風景 ・ 先生 ・ 友達 ・ 学校のおやつ
3	遊び・友達	・ 友達と遊んでいる風景 ・ その他娯楽
4	食事	・ 食事風景 / 食事内容 ・ その地方独特の食べ物(動物・野菜・果物・お菓子)
5	その他	・ 市場 / その他買い物場所 ・ 道路と子ども ・ 地域の自然と子ども ・ 地域のおまつり ・ 珍しい生きもの、物、習慣

< エピソード： 子供の日常生活 (写真を撮らせてくれた子どもからヒアリングする) >

1	毎日の暮らし	・ 家族の紹介 ・ 家(何でできてる、など) ・ 学校の様子(通学時間、休み時間の遊び) ・ 授業の様子(クラスの生徒数、など) ・ 遊び / 友達(放課後だれと何して遊ぶ?) ・ 家での食事(どんなもの食べる?) ・ 家の手伝い(どんなことする?) ・ 市場 / 買い物場所(どんなところで何を買う?) ・ 交通と子ども ・ 地域の環境 / 自然と子ども(地域はどんな環境) ・ 学校の時間割 / 学校の年間予定 ・ 一日の過ごし方(平日 / 休日、朝起きてから夜寝るまで)
2	思い	・ 好きな教科は? ・ なぜ学校に行くのか? ・ 尊敬する人は? ・ 大きくなって何になりたいもの / したいこと ・ 大切なこと
3	メッセージ	・ 日本の子供たちへのメッセージ

2.3.5. HANDSオリジナル国際理解教育教材作製

以上のような活動を通じて、HANDSブラジル・プロジェクトサイト、及びHANDS東京本部で収集した「素材」を使用して、国際理解教育教材の作製を行った。その際、収集した素材と、その素材を使用して日本の子どもたち期待できる学びについて、HANDSスタッフと議論・検討した。その結果、作製する教材を使用した授業の際にカバーする学習領域を、大津が示した基本枠組み⁸の中の「文化理解」「文化交流」「相互依存」とし（表6）実施対象を小学生中・高学年と定めて、以下～のような教材を実際に作製した。

また教材を作製する際に、「大人の判断」というフィルターがかかったメッセージを子ども達に与えることを極力避け、子ども達自身が「感じ」「理解し」「判断し」、あるいは「疑問」を抱くことができるよう心がけた。そのために、写真や物を通じて、ブラジルの子供たちのありのままの生活を伝える教材となるよう留意した。

表 6 国際理解教育 実践的枠組み

	1	2	3	4
A. 多文化社会	文化理解	文化交流	多文化共生	
B. グローバル社会	相互依存	情報化		
C. 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D. 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	

フォト・ランゲージ「ハイムンド君の一日」

HANDSプロジェクトサイトである、ブラジル国アマゾナス州マニコレ市の農村部に住む、「ハイムンド君10歳」が、朝起きてから夜寝るまでの一日の生活を追った写真に、簡単な解説をつけたA3サイズのパネルを作り、この使用解説書と共に、フォト・ランゲージ教材「ハイムンド君の一日」を作製した。子ども達は授業の中で、ハイムンド君の一日を追ったパネル写真を見て、「日本と同じこと」「日本と違うこと」「疑問・質問」をできるだけたくさん見つけてカードに書き出し、模造紙に貼るという活動を行う。この活動を通じて、「文化理解（違うけど同じ）」「文化交流（違うから面白い）」を学習する。

フォト・ランゲージ「ブラジル写真当てゲーム」

HANDSプロジェクトサイトである、ブラジル国アマゾナス州マニコレ市の農村部で撮影した、日本人にとって興味深い「人々の習慣」「生活用品」「生き物」「食べ物」「建物」などの写真とその解説文を、別々のA3サイズパネルにして、写真と解説文をマッチングさせるクイズ形式教材を作り、この使用解説書と共に、フォト・ランゲージ教材「ブラジル写真クイズ」を作製した。子ども達は授業の中で小グループに分かれて、写真と解説文をマッチングさせ、それぞれをマッチングさせた理由を考えて、発表する。この活

⁸ p.9 参照

動を通じて、「文化理解（違うけど同じ）」「文化交流（違うから面白い）」を学習する。

フォトランゲージ「ブラジルの大都会」

記述、の写真が、HANDSプロジェクトサイトである農村部の写真であるため、子供たちに、ブラジルに対する偏ったイメージを持たせないようにするために、補足的に、大都会（リオ・デジャネイロ）の様子を映した写真も複数用意した。

物ランゲージ「ブラジルBOX」

ブラジルで収集した「ブラジルの子供の学校生活を理解するため物品」及び「日本とブラジルのつながりを学ぶ物品」などが入った「ブラジルBOX」を、使用解説書付きで作製した。この「ブラジルBOX」を通じて、日本の子ども達が子供の目線から、ありのままのブラジルを理解することを目指す。子ども達は授業の中で小グループに分かれて、「ブラジルの子供の学用品」や「日本とブラジルのつながりを学ぶ物品」を実際に手に取ってよく観察し、「日本と同じこと」「日本と違うこと」「疑問・質問」をできるだけたくさん見つけてカードに書き出し、模造紙に貼るという活動を行う。この活動を通じて、「文化理解（違うけど同じ）」「文化交流（違うから面白い）」「相互依存（私たちと世界のつながり）」を学習する。

ブラジルビンゴゲーム

ブラジルで収集したエピソードや、日本とブラジルとのつながりに関わる情報などを織り交ぜた、「ブラジル・ビンゴゲーム」を作成した。ビンゴゲームを通じて、ブラジルの暮らしに関する知識や、日本とブラジルのつながりに関する知識を楽しく効果的に学ぶことを目的とする。この活動を通じて、「文化理解（違うけど同じ）」「文化交流（違うから面白い）」「相互依存（私たちと世界のつながり）」を学習する。

上記のような形で国際理解教育教材を作製することはHANDSとして初の試みであった。写真や物などの素材の状態から、4つの教材として完成させるまでに費やした時間は、延べ約40時間であった。また、教材作製用に要した主な費用は、フォトランゲージ用の約40枚の写真をA3サイズに出力印刷してラミネート加工した2万円と、現地で購入した学用品など約2万円の合計4万円であった。

2.3.6. 首都圏小学校での国際理解教育授業実施

3月初旬に、神奈川県川崎市にあるA小学校の6年生の2クラスを対象として、国際理解教育授業を実施した。実施にあたり、HANDSスタッフとA小学校の先生方と共に授業案を検討した。今回は時間的制約により、作製した4つの教材を2つずつ使用して、それぞれ45分間の2種類の授業を表7、8の授業案のとおりを実施することとなった。

表 7 国際理解教育授業案(1)

タイトル		「写真」と「もの」からブラジルを学ぼう！	時間 配分
ねらい		外国の文化を尊重し、自分たちと異なるところもたくさんあるが、同じところもたくさんあることに気づく	
対象		小学校 6 年生	
所要時間		45 分	
準備物		- 教材「ブラジル：フォトランゲージ（少年の一日）」 - 教材「ブラジル：ものランゲージ（子供の日用品）」 - 世界地図とブラジル地図 - カラー模造紙（3 色 x 5 枚） - カード又はポストイット（20cmX10cm くらい）：30 枚 X 人数分 - 台付きセロテープ（1 つ） - マジック（子供人数分） - ふりかえりシート - タイマー - ブラジル追加情報カード（ブラジルについて学べるウェブサイトの紹介） 「写真」や「もの」を置くテーブル 4 つ - ホワイトボード（黒板） - 子供が準備するもの：筆記具（鉛筆、消しゴム） - CD デッキとブラジル音楽 CD	
進め方	0	会場事前準備： - テーブルを 4 箇所に置く - 模造紙 3 色を、4 箇所のテーブルの近くと、教室の前に貼る - 世界地図と、ブラジル地図を掲示しておく	
	1	導入： ファシリテーター等の簡単な紹介	3 分
	2	「日本と同じだと思うこと、日本と異なると思うこと」を想像してみよう： - 子供に「ブラジルについて、日本と同じだと思うこと、異なると思うこと、疑問」に関し、カードに書いて、教室前にある色模造紙にはってもらう。「正解である必要はなく、想像で何でも書いてよい」ことを強調する。 - 模造紙は、「同じこと」「異なること」「疑問」別に 3 色用意する。 - 子供がカードに書いて貼る際に、同じ内容のカードがあれば、その近くに貼る。 - 子供が書いたカードの情報共有：たくさん出たカードや、珍しい意見などを紹介。	5 分
	3	フォトランゲージ「ハイムンド君の一日」の写真紹介： 「ハイムンド君の一日」の写真が撮影された地域について、地図を使って紹介。 「ハイムンド君の一日」写真を、簡単に紹介する。	3 分
	4	ものランゲージ「ブラジルの子供の日用品」の紹介： ブラジルの子供たちが使っている「日用品」を、簡単に紹介する。	3 分
	5	ブラジルの「写真」と「もの」から、日本と同じこと / 異なることを見つけよう： - テーブルを 4 箇所に用意し、上記 3、4 で紹介した「写真」と「もの」を置く。 - クラスを 4 つのグループに分ける。 - グループごとに、4 つのテーブルをまわり、テーブルに置いてある「写真」や「もの」をよく観察して、「日本と同じこと、日本と違うこと、疑問」をできるだけたくさん見つけ出す。 - 見つけ出したことをカードに書いて、模造紙に貼る。 - すでに模造紙に張ってある内容のカードは書かない、というルールを説明。 1 箇所の滞在時間は 5 分間で、時間がきたら次のテーブルに移動するよう指示。	20 分
	6	ふりかえり： ふりかえりシートに、ブラジルの「写真」や「もの」から、日本と同じ・違うと思うことを見つける活動をしてみて、思ったこと、感じたことを書く。	5 分
	7	まとめ「日本と同じこと、日本と違うこと」： - ふりかえりシートに書いたことを、数名の子供に発表してもらう。 - ブラジルには「ハイムンド君」が住んでいる田舎と異なる「大都会」も存在することを、「大都会」の写真を見せながら補足説明する。 - ブラジルの情報をさらに調べたい子供のための「ブラジル情報カード」を渡す。	5 分

表 8 国際理解教育授業案(2)

タイトル		「ゲームで学ぼう ビバ! ブラジル」	時間 配分
ねらい		外国について、日ごろ抱いている固定観念や先入観を見つめ直す。	
対象		小学校 6 年生	
所要時間		45 分	
準備物		・ ブラジルビンゴ ゲーム用紙 (子供分 + α) ・ ブラジル写真当てゲーム教材 (A3 サイズ 1 セット、A4 サイズ 2 セット) ・ 写真当てゲーム結果発表用模造紙 (7 枚) ・ 世界地図とブラジル地図 ・ マジック (子供の人数分) ・ ふりかえりシート (子供の人数) ・ ブラジル追加情報カード (ブラジルについて学べるウェブサイトの紹介) ・ ホワイトボード (黒板) と磁石数個 ・ 台付きゼロテープ ・ タイマー ・ 子供が準備するもの: 筆記具 (黒鉛筆、赤鉛筆、消しゴム) ・ CD デッキ + ブラジル音楽 CD	
進め方	0	会場事前準備: ・ 写真当てゲーム結果を書くための模造紙を準備しておく ・ 世界地図と、ブラジル地図を掲示しておく	
	1	導入: ・ ファシリテーター等の簡単な紹介	3 分
	2	ブラジル ビンゴ クイズ: ・ ブラジルビンゴ・ゲームシートにあるクイズに、正解なら○を、不正解なら×をつけさせる。回答時間は 3 分で、時間がきたらタイマーで知らせる。 ・ クイズ正解を発表し、あっていたら赤で薄くぬりつぶす ・ 赤で塗りつぶした□が、縦 / 横 / 斜めのいずれかそろったらビンゴ	3 分
			7 分
	3	ブラジル写真当てゲーム: ・ 6 つのグループに分かれる ・ 次の段階で紹介する「写真」が撮影された地域 (マニコレ) について、地図を使って簡単に紹介する。 ・ グループごとに、3 枚 1 組の写真 (A4 サイズ) を渡し、そこに写っているものについて、自由にディスカッションさせる。 ・ 次に写真の説明文 (A4 サイズ) を渡し、どの写真と説明文が一致するかについて、想像させる。 ・ グループごとに想像した結果を、模造紙に書かせる。 ・ グループごとに、クイズ結果を発表させる。 ・ 発表後に正解を発表し、写真の補足説明をする。	5 分
			5 分
			15 分
	4	ふりかえり: ・ ふりかえりシートに、ビンゴゲームや写真当てクイズをしてみて、思ったこと、感じたことを書く。	5 分
	5	まとめ: ・ 今日の「ゲーム」や「クイズ」を通じて、どのような感想を持ったか子供に発表させる。 ・ 最後に、ブラジルには「写真当てゲーム」に写っているような「田舎」とは異なる「大都会」も存在することを、「大都会」の写真を見せながら補足説明する。 ・ ブラジルの情報をさらに調べたい子供のための「情報カード」を渡す。	5 分

6年生2クラスを対象に授業を実施した結果は以下のとおりである。

「写真」と「もの」からブラジルを学ぼう！（45分）

授業の開始時に、「ブラジルと日本を比較して、同じこと／違うこと」を想像し、カードに書いて模造紙に貼る、という活動をした。その結果、出てきた子ども達の答えは、「同じこと」としては、「サッカーをする、動物がいる、言葉がある、国である、家がある」など20種類くらいのカードが貼られた。「違うこと」としては、「国旗、時差がある、文化、肌の色、食べ物、歴史、あつい」など40種類くらいのカードが貼られた。「同じこと／違うこと」いずれも一般的／抽象的な内容であり、また、「同じこと」のカードよりも「違うこと」のカードが多いことが印象的であった。

次に、HANDSプロジェクト・サイト（ブラジル農村部）に住む「ハイムンド君の一日の生活」を追った写真と、「ブラジルの子供の学用品」及び「日本のアニメの現地語版や日本のことを記述した箇所がある歴史教科書」などを、子供たちが実際に手にとってよく観察し、そこから「ブラジルと日本と比較して同じこと／違うこと」を発見するという活動をした。その結果、出てきた子ども達の答えは、まず「同じこと」として、「授業がある、学校が終わるとみんなで遊ぶ、自分が住んでいる国の言葉を学習する、歯磨き粉をつけて歯を磨く、家が木製、魚を食べる、宿題がある、日本のマンガを読んでいる、教科書に絵や写真がたくさんある、使っている文房具はあまり変わらない、キャラクターの学習用具がある」など、具体的なものを多数挙げた。また、「違うこと」についても、「教科書が大きい、日本のマンガ本がブラジルでは少し薄い、学校でおやつがでる、はだしてサッカーをしてる、12月ごろが夏休み／7月ごろが冬休み、蛍光灯がない、家の床が高い、学校の窓が少ない、教室に自分のものを置けない、文房具がもろそう、ランドセルがない、『宗教』という科目がある」など、やはり具体的なものを多数挙げた。



ハイムンド君の生活を写した写真をよく観察し、「日本と比較して同じこと／違うこと」を発見してカードに書き出し、模造紙に貼る子供たち

最後に振り返りシート¹³に感想を書いてもらった。「ブラジルの写真やものを見て、日本と同じ・違うと思うことを見つける活動をしてみて、思ったこと、感じたことを書いてみよう」という問いかけに対し、以下Box 2のような感想が出された。

Box 2 子ども達の感想 1（振り返りシートから抜粋）

「日本とブラジルは、地球の正反対だから、暮らしは全然違うと思ってたけれど、似てることもたくさんあって、びっくりしました。でも日本とブラジルでは違いもたくさんありました。その中でも、ピラニアは食べれないと思ってたのに、ピラニアを食べていて、とてもびっくりしました。また、建物が少し高くなっているの（高床式の家）は、雨からの被害（雨季に川が増水すること）を防ぐためだと知り、気候が違っていると生活も全然違うんだなぁと思い、びっくりしました。また、日本のマンガがブラジルでも広がっていて、びっくりしました。」

「日本とまったく物が違うのかと思ったけど、同じ物もあったので、ビックリしました。（田舎で）毎朝水をくみに行くのは大変だと思いました。水道ができたらいいです。写真を見て、日本の同じ物をさがすと、同じ物がたくさんあって、びっくりしました。1月、2月が夏休みなのが、不思議でした。夏と冬が日本と逆なのかと思いました。」

「考えてみると、日本と『同じこと』『違うこと』はたくさんあって、びっくりしました。（ファシリテーターが）いくつかの質問に答えてくれたのもよかったと思います。また、カードに好きなように書き、好きなようにはれるので、自由に、楽しくブラジルについて学ぶことができました。自分の知らなかったこともたくさん知れました。」

「日本だけでなく外国（ブラジル）の事も調べると『ブラジルは日本と同じ事、違う事があるんだー』と考えたりして、もっともっと調べたくなります。日本だけの事を考えるのではなく、外国の事も考えると『日本では悪い所がブラジルはいいかもしれない、そんなのを直せばいいんだー』となり、どちらもよくなると思いました。違うこともいっぱいあるけど、同じ事もあって、いい勉強になりました。」

「ブラジルと日本は全く違うと思ってたけど、言葉や肌の色などが違うだけで、生活は似たような感じだったので、おどろきました。」

「写真や物を見る前と後では、全然違った。一番おどろいたのは、日本のマンガがあったことです。なんて書いてあるのか全然わからなかった。でも、マンガ本の表紙に漢字があったのでおどろきました。」

「同じ地球上なのに、お金があるのとないのとで生活の仕方が全くちがって疑問に思った。どうして地球上なのに、話す言葉が違うのだろう。どうして国で区切る必要があるのだろう。」

「日本とブラジルは全然違うと思っていたけれど、意外と共通点が多かったのでおどろきました。また、日本より格差があって、苦しい生活を送っている人がたくさんいることが分かり、自分たちが幸せにいらしていることに感謝しなければなぁと思いました。」

¹³ 添付資料6

ゲームで学ぼう ビバ！ブラジル

授業の始めに、ブラジルで収集した現地のエピソードや、日本とブラジルのつながりに関わる情報などを織り交ぜたクイズ「ブラジル・ビンゴ・ゲーム」を行った。ブラジルの暮らしに関する知識や、日本とブラジルのつながりに関する知識を、ゲーム感覚で楽しく学びながら、自分の思い込みが間違っていたことや、在日ブラジル人の多さ、在ブラジル日系人の多さなどに驚いていた子ども達が印象的であった。

次に、HANDSプロジェクトサイトのブラジルの農村部（マニコレ市）で撮影した、日本人の興味をひく現地の人々の「習慣」「生活用品」「生き物」「食べ物」「建物」などが写っている写真シートを、子ども達に渡した。写真に写っているブラジルの見慣れない「もの」に対して、子ども達は多少興奮気味な反応を示し、写真に写っているものが何か色々と想像して、楽しく議論していた。

次に、それぞれの写真の解説文にあたるシートを渡し、写真と解説文をマッチングさせ、それぞれをマッチングさせた理由を模造紙に書いて発表してもらった。これは全てのグループが正解で、マッチングさせた理由についても、渡された写真シートという映像情報と、解説シートの文字情報から、子ども達なりに色々と観察し、考え、分析した努力の様子をうかがい知ることができた。



写真と解説文をマッチングさせ、そのようにマッチングさせた理由を模造紙に書く子供たち

最後に振り返りシート¹⁴に感想を書いてもらった。「ビンゴゲームや写真あてクイズを
してみて、思ったこと、感じたことを書いてみよう」という問いかけに対し、以下Box
3のような感想が出された。

Box 3 子ども達の感想 2（振り返りシートから抜粋）

「ぼくは、ブラジルのことで知っていたのは、サッカーがさかんだということ
や、アマゾン川があるということだけだったし、あまり気にしてなかったけど、
今日この時間でブラジルや他の国のことを調べたりすることは、楽しいことだ
なぁと思いました。」

「ブラジルはブラジルなりの生活を送っていて、普通に生きているんだなぁと
改めて感じました。又、木の実や芋など、ふだん食べている物までわかって良
かったです。」

「・・・ブラジルのイメージはアフリカのような平地ばかりだと思っていたけ
れど、おもちゃ屋や服屋もあるなんて、びっくりしました。」

「ビンゴゲームではブラジルの知識がよくわかり、写真クイズでは、ブラジル
のいなかの方の生活がよくわかり、最後の都会の写真では、ブラジルにも大都
市などがあることが分かりました。今日のブラジルの授業を受けてブラジルに
も格差があったり、すごいいなかから大都市があることが分かりました。」

「日本とは住んでる場所や人も違うけれど、場所によって貧富の差があったり、
設備の差があったりして、日本と似ている所もあると思いました。それに、日
本にたくさんブラジル人がいて、ブラジルにも日本人が多くいることにおどろ
きました。また、ブラジル人は物を大切にし、自然と調和し、共に生きている
ので、すごいと思いました。」

「・・・貧富の差はあるけど、貧しい人でも子供どうしが仲良くしているので、
そういうくらしもいいなと思ったし、ブラジルの都会でのくらしもいいと思
いました。色々な顔があるブラジルにとっても興味を持つことができました。」

「・・・神奈川県に約1万3千人のブラジル人がいるのに、私はブラジル人に会
ったことがなかったので、すごくびっくりしました。」

「・・・ブラジルは貧しい人達ばかりで、いなかのイメージがあったので、想
像とちがっていたので、もっとおどろきました。・・・ブラジル語ではなく、ポ
ルトガル語で話すということも初めて知り、ブラジルのことがよくわかりま
した。」

「ブラジルにも日本の様に栄えている所と、少しいなかのような所があるんだ
なぁーと思いました。リオ・デジャネイロと日本の東京や米国のN.Y.は似たよ
うな感じで、日本の青森や秋田などのいなかの方と、ブラジルのいなかのよ
うな所は、見た目は全然違ったけど、その地域特有の食べ物があるところや、伝
統のようなものがあるというところは、どこも一緒かな・・・と思いました。」

「・・・ブラジルはこれからすごくもっと国民の生活水準が上がると、リオ・
デジャネイロの大都会（の写真）でわかりました。」

「今日、たくさんブラジルのことを知って、たのしかったです。ゲームなどを
入れるとわかりやすいんだなぁーと思いました。」

¹⁴ 添付資料6

今回のA小学校での国際理解授業の実施を通じて、HANDSが試験的に作製した教材は、「国際理解教育の教材として十分使用に耐えうるものであった」と、学校教師の方々より高い評価をいただいた。そして、「・・・今後も機会があれば、今回のような単発授業ではなく、年間を通じての国際理解教育授業カリキュラムとして、実施をお願いしたい。」旨の依頼を受けた。

今回は試験的授業ということで時間的制約もあり、1時限（45分間）のみの単発の授業であったが、将来的には、学校側と相談しながら、より多くの学習領域をカバーできるような、国際理解教育パッケージとして膨らませることは十分可能である。例えば、今回実施した授業は、国際理解教育の学習領域のうち「文化理解」「文化交流」「多文化共生」「相互依存」などをねらいとして、「ブラジルの子供たちのありのままの日常生活」を紹介するものであったが、さらに段階を進めて、HANDSの本来業務である、ブラジル農村部の保健医療問題を取り扱うレベルにまで膨らませ、「開発」「人権」「環境」などの学習領域もカバーすることも可能と思われる。

いずれにせよ、多忙な国際協力NGOでも、本来業務の合間の時間をみつけて、ある程度のレベルの国際理解教育教材を作製して、効果的な授業を実施できると証明されたことは、大変喜ばしいことであった。

2.4. 分析 - 国際協力NGOが所有するリソースを有効利用した国際理解教育の推進は可能か -

2.4.1. 国際協力NGOが国際理解教育にかかわる意義

今回、NPO法人HANDSが「国際協力NGOが所有するリソースを有効利用した国際理解教育の推進」について調査研究したいと希望するに至った背景には、HANDSスタッフが、地域や学校関係者などから、国際理解や国際協力に関する授業や講演会などを依頼されることが多く、そのたびに、本来業務の多忙な合間を縫って、表現は悪いがどちらかというところ「場当たりの」に対応してきたという事情がある。しかし、「場当たりの」に対応する中で、スタッフの誰もが「このままで良いのだろうか・・・」と悩みながら、ほとんど手弁当で国際理解教育に関わってきた。その具体的内容は、現地の様子や活動などを写した写真などをスライドなどの形式で見せたり、現地の話をするといったことが多かった。

そのような現実を踏まえ、今回の約11ヶ月間にわたる調査研究期間中、「国際協力NGOが国際理解教育にかかわる意義」について、HANDS内で議論を重ねることができた。議論の主な内容は、以下3点に整理することができる。

国際理解教育における国際協力NGOの強み

国際理解教育との関わりの中で、HANDSのような国際協力NGOの最大の強みは、フィールド・プロジェクトを持っているということである。フィールド・プロジェクトを持っているということは、子供も含めた、現地の人々と“今”の暮らしを日々共にしているということであり、また、現地の人々が“今”直面する社会問題も、日々目の当たりにしているということである。このような立場にある国際協力NGOにとって、国際理解教育の教材として活用可能な最新の素材（映像資料、データ、エピソードなど）は大変収集しやすい。

例えば今回の調査研究の中の海外調査において、現地の少年の一日を追った「写真」や少年や村人の暮らしに関わる「エピソード」、また、少年が使用する学用品などの「もの」が、約3日間という大変短い期間で収集可能であったのは、HANDSがそこですでに活動しており、現地の人々との関係性がすでにできていたからである。国際理解教育に関わる様々な種類の団体の中で、そのようなポジションにいるのは、おそらく国際協力NGOのような活動をしている団体だけではないだろうか。

今回の調査で収集・分析した他団体による国際理解教育教材の中で、国際交流系の団体や、国際理解や開発教育を専門業務とする団体によるものは、教育教材としての完成度は非常に高いものの、教材に用いられている素材の“鮮度”という意味においては、特に写真などの映像資料の場合、年数が経ってしまっていて、“今”という現実感が薄れているケースが多い。これは、海外にフィールドを持っていないこのような団体が、映像資料などの最新の「素材」を定期的に収集することが困難なためと推察される。

国際理解教育における国際協力NGOの弱み

国際理解教育における国際協力NGOの弱みとしては、資金、時間、技術などが挙げられる。HANDSのような国際協力NGOの本来業務は、第一にフィールド・プロジェクトであり、次いで国内における人材育成やアドボカシーなどがある。そのような状況の中、国際理解教育を実施するための資金は現在のところ無く、本来業務に多忙なスタッフには時間的な余裕もなく、多忙なスタッフに、国際理解教育の技術を高める時間的な余裕などない。そのような「無い無い」づくしの現実の中で、外部からの国際理解教育の依頼に手弁当で対応してきた。

国際協力NGOは国際理解教育にかかわるべきか？

既述のように「無い無い」づくしの中で国際理解教育に関わっているのが日本の国際協力NGOの現実であるが、それでは、国際協力NGOは、いっそのこと国際理解教育から手

を引いてしまう方がいいのでしょうか？あるいは、「無い無い」な状況の中で、これまでどおり、「その時できること」をやっていくというスタンスを続けるのか？そのような問いかけをすると、HANDSスタッフは、既述のような強みを持つ国際協力NGOが、国際理解教育から一切手を引いてしまうことには反対であり、フィールドを持つ国際協力NGOは、できればなんらかの形で国際理解教育に関わりたい、関わるべきだと感じている。また、今後も関わっていく場合には、現在のような場当たりの国際理解教育でなく、少しでも改善したいと感じている。

2.4.2. 国際協力NGOが実施可能な国際理解教育の形

今回の調査研究の重要なテーマの一つに、「国際協力NGOが実現可能な、よりよい国際理解教育の形を明らかにする」というものがあった。そして、調査研究の結果、HANDSのような国際協力NGOが、今後も国際理解教育に関わっていきたいと希望する場合、以下のようなポイントに留意することで、現在の「長期的視野に欠けた国際理解教育」な状況から、多少レベルアップできるのではないかとということが明らかになった。

国際理解教育の「実践的枠組み／学習領域の構造」について理解し、意識する

「長期的視野に欠けた国際理解教育」から脱却するためにまず必要なことは、授業を通じて、子ども達に何を学んでほしいかをしっかり意識することである。そのための最低限の知識として、既述の「国際理解教育の実践的枠組み・学習領域の構造¹⁵」を理解し、明確な学習目標を意識しながら授業計画を立てることが重要である。また、このような枠組み／学習領域は、学校教師と共に国際理解教育授業の検討をする際に、大変有用なツールとして役立つ。

国際協力NGOが持つ強みを生かした国際理解教育を心がける

多忙な国際協力NGO限られた時間的・人的資源の中で国際理解教育を実施するには、国際協力NGOの強みを最大限生かすことが重要となる。そのためには、例えば通常のフィールド業務の際に、写真撮影するにしても、日頃から「国際理解教育の素材として使えるな」という意識を持っているだけで、教材として活用しやすい写真の撮影が「業務の合間のちょっとした時間」に可能となる。また、現地で生活する際や、日本から現地を訪問した際に、「国際理解教育の素材として使える“モノ”はないかな？」という意識を持っていると、日本人にとって色々興味深い現地の“モノ”が目に入り込んできて、そのような“モノ”の収集が「業務の合間」でも可能となる。このようにして、通常業務の合間に収集した「写真」や「もの」が、それほど時間をかけないで、それなりの「オリジナル教材」に加工できることは、今回の調査研究で証明されている。

¹⁵ p.8,9 参照

より学習効果の高い参加型授業手法を取り入れる

国際理解教育を効果的なものとするためには、できるだけ子供が参加できる形にすることが重要である。現地の写真を見せる場合も、「大量の写真をスライドなどで見せて一方的に説明する」といういわゆる「講義形式」だと、子供の側にあまり学びが残らない危険性が高い。同じ写真を見せるにしても、「フォト・ランゲージ」などのような形にして、ちょっとひと工夫するだけで、子供の学習効果は飛躍的に高まる。

2.4.3. 国際理解教育に対して国際協力NGOが持つべき問題意識

国際協力NGOとして、どのような問題意識を持って国際理解教育に取り組むことが望ましいか？これに対する答えとして、「地球の仲間たち」という、非常に優れた国際理解教育教材(フォト・ランゲージ)を開発した「開発教育を考える会」¹⁶による考えを参考に、以下3つを提案したい。

文化には優劣がつけられないこと、そしてみな同じ仲間であるということを知らせる

お互いの顔が見えてこそ、今、地球上で起こっている様々な問題を共有することができる。地球上のあらゆるところに、家族の営みがあり、子どもたちがいる。それぞれの土地の気候風土にあった生活があり、文化がある。その文化には優劣がつけられないこと、そして、みな同じ仲間であるということを知らせたい。これが国際理解教育の原点となるべきである。

自分たちの暮らしを見つめ行動できる人に育てる

物と情報に溢れた時代に育っている日本の子どもたちは、今の自分の生活や考え方が当たり前のことと思っている。そのような日本に生きる子どもたちにとって、他の国々の子どもたちの生活、考え方、その背景にある伝統的な文化を知ることは、自分たちの暮らしを見つめ直すことであり、欠けていること、無駄にしている何かを発見することにもなる。さらにそこから、自分と他の国々とのつながりや地球全体の問題が見えてくる。子どもたちには、積極的に多くの価値観に触れ、自分の考え、見方をぶつけ合って多様なものの見方のできる人に育てて欲しい、いつも問題意識を持ち行動できる人になって欲しい。

偏見や哀れみからでない国際協力の芽を育てる

国際理解教育教材を通じて、他国の子ども達の暮らしに触れることで得られる「地球の仲間」としての共感をもとに、NGO活動や国際協力について知り、自分たちにもできることがあることに気づかせる。上記のようなステップを踏んだ後で、NGOが活動する特定の国の現実やNGO・国際協力活動について紹介することにより、「発展途上国の子ど

¹⁶ 開発教育を考える会 <http://www.nakamatachi.jp/chikyu/>

も「かわいそう、貧乏」といった一面的な見方だけでその国をとらえるのではなく、自分たちと同じように今を生きる仲間たちである、といった共感を持ち、「仲間たちのために共に問題解決を考える」心を育てたい。

2.5. 提言 - 国際協力NGOと国際理解教育の今後に向けて -

国際相互依存化が進み、国内に居住する外国人もますます増加する現代、日本の子供たちに幼いうちから適切な国際理解教育を受けさせることは、大変重要な意義を持つ。国際理解教育実施に関わることができるプレーヤーは複数存在するが、その中でも、国際理解教育に使用できうる、「海外の現場／人々の最新情報」に関する豊かなリソース(素材)を持つ国際協力NGOは、大変重要なプレーヤーとなりうる。しかし残念なことに、現在の日本社会は、国際協力NGOが持つ豊かなリソースを、国際理解教育推進のために十分活用できているとはいいがたい。そこで、今後、国際協力NGOが、日本の国際理解教育を推進する上でより重要な役割を担える環境を構築するために、以下3つを提言として挙げたい。

国際理解教育の質の向上のために、多忙な現場教師に全てをゆだねるのではなく、学校がNGOなどの外部機関に委託契約できるような制度を地方自治体が構築する。

国際協力NGOが国際理解教育を実施する際の障害の大きなものとして、資金的な問題がある。言い換えると、国際協力NGOが国際理解教育を実施しようとしても、どこからも実施のための資金が得られず、基本的に「ボランティアでやっている」というのが現状である。一方、学校現場では、教師が国際理解教育を実施しようとしても、「時間がない」「技術がない」「知識がない」「相談する相手がいない」などの理由により、理想とする授業を実施できないでいる。このような問題を解決するために、地方自治体がその予算の中に「国際理解教育の外部委託」を設け、国際協力NGOが現場教師と相談しながら、学校における国際理解教育を事業として実施していけるようなシステムを構築することが望まれる。

国際協力NGOによる国際理解教育を、民間企業が社会貢献事業として支援できる連携体制を、国際協力NGOと民間企業とで構築する。

記述 で述べたような国際協力NGOの資金問題を解決するもうひとつの可能性として、民間企業の社会貢献事業(CSR)として、国際協力NGOが国際理解教育を実施するという考えもある。これは、国際協力NGO側が、企業の「社会貢献事業」として採用されるような形の「日本の子供たちを対象とした国際理解教育パッケージ」を作製し、学校での国際理解教育授業実施にかかる必要な経費(人件費など)を、企業側に出してもらおうというものである。最近「企業の社会貢献事業」が声高に叫ばれるようになっているが、現実には、まだ、「社会貢献事業として何をしたいのかわからない・・・」と悩んでいる企業も少なくない。そのような状況の中、このシステムが機能すれば、企業にとっても、国際協力NGOにとっても、そして学校にとっても、大変有益なものとなりうる。

< 謝辞 >

外務省NGO専門調査員業務の遂行にあたり、様々な形でご支援・ご協力いただきました以下の方々に、この場をお借りして、心より御礼申し上げます。

- ・ 外務省国際協力局民間援助支援室の皆様
- ・ HANDS東京本部スタッフの皆様
- ・ HANDSブラジルオフィスの皆様
- ・ HANDSブラジルのプロジェクトサイト住民の皆様
- ・ 神奈川県川崎市 A 小学校の先生方、及び6年生児童の皆様

< 参考文献 >

平成 15 年度～平成 17 年度 科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)）研究成果報告書 研究課題番号 15330195 . 「グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的・実践的研究」. 第 1、2 分冊 . 平成 15 年度～平成 17 年度 科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)）研究成果報告書 研究課題番号 15330195 . 2006 年

国際協力機構 中部国際センター 「教室から地球へ 開発教育・国際理解教育 虎の巻」東信堂 2006年

帝塚山学院大学国際理解研究所 「国際理解教育論選集：学校教育編」創友社 1995年

帝塚山学院大学国際理解研究所 「国際理解教育論選集：社会教育・学校外編」創友社 1995年

国際理解教育学会 「国際理解教育 Vol.13」 2007年

国際理解教育学会 「国際理解教育 Vol.9」 2003年

財団法人国際協力推進教会 「国際開発・国際理解教育ハンドブック」 株式会社ビュープロ 2001年

開発教育協会 「開発教育ってなあに？」 2005年

開発教育教会 「参加型学習で世界を感じる」 2003年

開発教育教会 「お弁当屋さんゲーム」2007年

開発教育教会 「たずねてみよう！カレーの世界」2003年

開発教育教会 「新・ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら」2006年

開発教育教会 「コーヒーカップの向こう側」2005年

開発教育教会・神奈川県国際教育交流教会 「新・貿易ゲーム」2006年

財団法人福島県国際交流教会 「みんなでつなごう！教室と世界」2002年